

目的 わが国の食料消費は、「日本型食生活」または「新日本型食生活」と呼ばれ、独自性の強い消費パターンを形成しているが、東アジア地域との共通性も高い。なかでも、韓国とは最も類似している。これは、ともに稲作農業を基本とし、食文化の共通点も多いことや、高度経済成長により食生活の近代化が進展したなどによるものと考えられる。そこで、本研究の目的を、統計資料にみられる日韓の食料消費行動を比較することにより、食料消費行動における東アジアの地域性と両国固有の特徴に分離することとする。

方法 日韓の「食料需給表」「家計調査年報」を用いて、食料消費と栄養消費の比較を行う。日韓の高度経済成長期から現在までの栄養消費と食料費支出の変遷を示す。内容は、3大栄養素（熱量・たんぱく質・脂質）の推移、栄養消費と国民所得の関係、栄養単価当たりの支出金額の推移、食料費と食料構成比の推移などである。また、計量的に日韓の食料消費行動の違いとその経年的変化を示すために、パラメータを時間の関数と仮定したM. Nerlove型モデルを応用した動学分析を行う。

結果 経済の発展とともに、日韓の食料消費は、穀食型から肉食型へ、また、食生活の質的变化が顕著になるなど同じ方向で変化してきた。しかし、最近まで「漢江の奇跡」と呼ばれるほど急速な経済成長をしてきた韓国では、食料消費も欧米型に向かって急速に変化し続けている。それに対し、日本は欧米型に近づきつつも変化せずに穀食型（東アジア型）の特徴を多く残して、安定した状態になった。これにより、日本の食料消費パターンが韓国と異なる特徴を示すものと考えられた。